

■ 原著 ■

## 民話「笠地蔵」の〔構成要素〕〔変容過程〕考

— 岩手の伝承を中心に —

中 村 一 基

(1988年1月20日受理)

Kazumoto NAKAMURA

A Consideration of the Factors in the Composing of the Folk Story "KASA JIZOU" and How It has Changed over Time  
— Based on the Process in IWATE Prefecture —

民話「笠地蔵」は、民話教材「かさこ地蔵」(岩崎京子再話)として現在使用されている全ての小学校二年国語教科書に入っている。民話教材「かさこ地蔵」が民話「笠地蔵」伝承のどの位置を占めているのかを明確にするために、民話「笠地蔵」の〔構成要素〕と〔変容過程〕について考察を行った。民話「笠地蔵」はいくつかの話型を持っているが、本稿では最も全国的に分布している〔来訪型〕(民話教材「かさこ地蔵」も同型)を、特に岩手県に残る伝承を中心に考察を行った。〔構成要素〕の考察の視点としては、爺の慈悲深さと其に対する婆の態度(喜ぶ、怒る)とに着目した。その結果、婆の喜びの感情の底に〔締念〕が、また怒りの感情の底に単に〔欲心〕として片づけられない〔現世利益を願う心〕が、爺の地蔵信仰と婆の生活意識との対峙関係という形で明確になった。とりわけ、〔変容過程〕の問題では、岩手にも伝承を持つ「布地蔵」の存在が〔笠〕に喩的な意味を持たせた〔歳神来訪信仰〕型「笠地蔵」から、〔地蔵信仰〕型「笠地蔵」への変容を、また婆の提供した〔布〕が交換価値を有する事によって、爺の慈悲深さが婆と一層の軋轢を生じる形で〔地蔵信仰〕型「笠地蔵」への変容が完成していった事を明確にした。また以上の考察から、民話教材「かさこ地蔵」が爺の地蔵信仰と婆の生活意識とが亀裂をあらわにする前段階の位置を占めるものである事が明確になった。

〔キーワード〕民間伝承、昔話研究、民話教材、地蔵信仰、生活意識

はじめに

民話「笠地蔵」は、全国的広がりを持つ民話で

ある。そして、その話型も『日本昔話通観』の分類によれば、岩手県に限っても〔来訪型〕〔地蔵浄土型〕〔来訪・隣の爺婆〕の三話型がある。ただ

し、県内の民話資料(注)を調べた範囲では、〔来訪型〕が圧倒的に多かった。(〔来訪型〕は『日本昔話大成』によれば、全国的分布を持つ。)本稿では現在民話教材として教科書に入っている岩崎京子の「笠子地藏」、また絵本として流布している瀬田貞二再話「笠地藏」(福音館書店)も〔来訪型〕であるという事実を踏まえ、岩手の〔来訪型〕「笠地藏」を中心に構成要素・変容過程について考察してみたい。地域・話型を限定しての考察であるが、この考察が変容する「笠地藏」の中から典型「笠地藏」を見出す為のとっかかりになればと思う。

## 〔構成要素〕考

### I 貧乏な爺婆

貧乏であることは、大晦日の年越しの準備が出来ないことによって現わされる。この極度の貧乏という要素は、「笠地藏」伝承が〔致富譚〕〔長者譚〕として成立するために欠かせない。ところで、なぜ彼等は貧乏なのか。彼等の生活手段は、爺が、①笠を売る(江刺・遠野)、②山で柴を取り、それを売る(遠野・紫波)、③炭焼(宮守のみ)、一方婆は、①「二人で働いたすげ笠」(江刺)、②「婆さまはかねがね丹精して溜めでおいた糸臍コ」(稗貫)「婆の織った布」(北上)とある。

笠作りが特殊な技能を必要とするとは思われず、また笠そのものも需要がそれほど多いとは考えられない。柴にしても浅見徹が「柴は、柴垣や柴の廬にされることもある。しかし、主たる用途は燃料、それもたきつけにしかならない。補助燃料である。商品価値は極度に低いものである。」(『玉手箱と打出の小槌——昔話の古層をさぐる——』中公新書71頁)と指摘しているとおりであろう。それゆえ、婆が笠作りに協力しても、生活状態が良好になることはない。また、「糸臍コ」を溜めていても「布」を織ったにしても、それは日常的に商品価値にはならない。このような二人はまさ

に「およそ人の世で、最も無力な、最も貧しい老人」(浅見)達であった。廣川勝美は「貧しさは生活の苦しさをいうよりは、彼等が社会の片隅や底辺にしか生きられないこと、さらにいうならば、捨てられ犯される存在である異人であることを明らかにしている。(『犯しと異人——昔話の基層——』人文書院74頁)と彼等の社会的位置を明らかにする。「笠地藏」が〔大蔵の客〕型の民話である事は周知のことだが、このような彼等の所に〔歳神〕が来訪して一夜の宿を乞う意味は大きい。則ち、全く生活に余裕のない老夫婦を〔歳神〕は試すのである。この場合、爺の善良な人格(人柄)が重要な構成要素となる。すなわち、貧乏なのに心優しい老人。社会から見捨てられた存在でありながら、心のやさしさを失わない人物に富(福)がやって来るのである。岩手の「笠地藏」の場合も、「貧乏で正直な」(二戸)「よい爺」(矢巾)とその性格は生かされている。また、それだけでなく「信心深い爺」(紫波)と地藏信仰との関わりを示すものもある。いずれにしても、古態から一貫しているのは爺の慈悲深い態度である。この慈悲深さが信仰レベルに至っているものか否かが、「笠地藏」考察の一視点となるだろう。そして、徹底した貧しさという要素は、婆の〔締念〕〔怒り〕の必然性を導き、爺の慈悲深さと拮抗するのである。

### II 大晦日

岩手の「笠地藏」も〔大蔵〕という設定は外していない。確かに〔歳神来訪信仰〕という民間信仰が「笠地藏」伝承の古層として働いている。(地藏の代わりに「正月様」という伝承もある。)[大蔵の客]型の「笠地藏」伝承(④夜中に旅人がやって来て宿を乞う。朝、石地藏となっており、鼻から米が出ている。⑤夜中に六地藏がやって来て泊まる。御礼として、鼻から米を出す。)が岩手でも遠野に残っている。現在、教材に選ばれた「笠地藏」伝承から見れば「特異型」(田口守「民話

『笠地蔵』小論——教材論のための遠い序章——

『文学と教育』第9集、6頁、昭和61年)と見られるが、田口も指摘するように、この方が古態であろう。基本的には〔報恩〕による〔致富譚〕として括れるだろうが、歳神によって富がもたらされるのは、来訪に対しての歓待によってであり、地蔵によって富がもたらされるのは、悲惨な状態(雨、雪に打たれる)に対しての思いやりによってである。明らかに、来訪の契機(前提か結論か)が異なっている。この契機の転換理由は何か。

それは石地蔵の代わりに道祖神・道陸神が富をもたらす「笠地蔵」伝承があることから分かるように、主として村落共同体の境界の路傍に置かれた〔石神〕へと伝承者(村人)の意識が向かった事による。則ち、④歳神・正月様→⑥道祖神・道陸神→③石地蔵という流れが考えられる。「笠地蔵」伝承にとって④から⑥への移行が決定的な要因となった。この事は富をもたらす客人神の来訪を待つという受身的な姿勢から常に身近にあって現世利益的願望をかなえてくれる神仏を祈るという積極的な姿勢へと転じていった事を示している。そして、この時、村人の生活空間を守るため〔塞ぎの神〕〔厄除けの神〕として路傍に立つ道祖神・道陸神へと信仰対象が転じていったのはむしろ自然と言えよう。そして、⑥から③への移行は、常に身近にあって現世利益的願望をかなえてくれる神仏という条件に地蔵の方が一層適することが、近世における民衆への地蔵信仰の浸透によって明らかになった事による。そして、〔石神〕から〔石仏〕という形態的な類似がその移行をより一層可能にしたと思われる。ただ、神仏主体の転移にも関わらず大晦日という設定が不変である事に、民衆の中の〔歳神来訪信仰〕という古層の根強さを感じずにはいられない。

### Ⅲ 年越しの手段とその効果

#### (1) 日常生活手段の延長によって

イ 笠を売る。(江刺・遠野)→無効。瀬田・

岩崎再話。

(2) 日常生活手段とは異なったもの(婆の所持)によって

イ、布を売る。(紫波・浄法寺・江刺)→有効

・無効・不明

ロ、鏡を売る。(宮守)→有効

ハ、糸臍コを売る。(稗貫・江刺)→無効

(3) 少しの銭によって(紫波)→有効が前提

この構成要素は、爺が六地蔵に出会うのは、売りに行く途中か、帰りがけかという次の構成要素と関連して、田口守が「民話『笠地蔵』小論」の結びで「『笠地蔵』の典型の抽出」に向かう際に「地蔵信仰や爺の態度をも問題としなければならぬ」(7頁)といった問題提起に深く関わる。

特に注目すべきは、有効であった場合の、爺の行為(笠を買って、地蔵に被せた)に対する婆の態度(①良いことをしたと喜ぶ。②怒る。)であろう。かつて、福山孝実は「笠地蔵の教材化」(『国語国文学会誌』21号、福岡教育大学国語国文学会、昭和54年12月)で「笠地蔵」の話を次のように分類した。

#### 1. 地蔵来訪型

① 独立型——長者型(全国的分布)

② 対立型——隣の爺型(東日本中心)

#### 2. 地蔵招待型——対立型——女房欲心型(西日本中心)

ところで、今問題にしている婆の態度はどの型に入るだろうか。特に、〔怒る〕という態度の捉え方はどうか。結論から言えば「女房との対立——夫の行為に反対・叱責するが、多くは欲のために失敗する。」(福山)という〔欲心〕型には入らないのではないか。

福山の分類を借りて婆中心に記せば、次のようになる。

地蔵 来訪型	$\left\{ \begin{array}{l} \text{独立型} \\ \text{〈貧しさに対しておおらか〉} \\ \text{対立型} \\ \text{〈怒り〉} \end{array} \right\}$	長者型		

婆の怒りは〔欲心〕からでなく、〔現世利益を願う心〕からである。両者は同一ではない。貧しい民衆の感情という視点からは、米や餅を買ってせめて人並みの正月を迎えたいという現世利益を願う婆の方が、わざわざ笠を買って地藏に被せる爺よりも自然である。また、夫婦の感情という視点からも、ささやかな料理でもって新年を迎えたいと思うのが自然である。それ故、婆は思いの全てを込めて秘蔵の或いは長い時間をかけて織った布などを渡したのである。爺はその気持ちを充分に知っていたはずだ、という婆の思いが爺の行為を裏切りとみる。婆の怒りは自然である。そして、この自然さに拮抗できるのは、爺の異常なほどの善良さ、或いは強い〔地藏信仰〕心のみであろう。則ち、渡した物が売れなかった時の爺の行為に対して、婆が持った感情は信仰心ではなく、多くの場合〔縮念〕であったという事を忘れてはならない。

3. 六地藏に出会うのは、売りに行く途中か、帰りがけか。

① 売りに行く途中→売れる可能性を残している段階。

イ、笠——そのまま被せて帰って来る。「やさしいお祖父さん」「おばあさんは優しいお祖父さんの心に驚きながら」(江刺) \* 笠地藏

ロ、布——②町で布を売って、その金で笠を買って被せた。「爺さんは、かわいそうになり」婆は怒る(江刺)。\* 笠地藏、③そのまま布を捲く。婆「良いごとしたんだ。」(浄法寺) \* 布地藏

ハ、鏡——鏡を売って、その金で蓑・笠を買って被せた。妻は怒る(宮守)。\* 笠地藏

①イの婆の驚きの内容は両義的である。爺の行為を受容できたのは、婆の気持ちの中に、笠が売れないかも知れないという予感があったともとれる。ロ③の婆の態度は売れないかも知れないという予感と地藏信仰との二面に依拠して自分に言い

聞かせているように推測できる。そうでなければ、不自然である。というのは、売れた場合において、全て婆は怒っているからである。信仰心の度合から言えば、婆の気持ちを無にする分、イよりもロ、ハの方が強い。

② 帰りがけ→商品価値は無の自覚

イ、笠——売れなかった笠5つ。六地藏、足りない分は自分の笠を脱いで。(遠野) \* 笠地藏。瀬田・岩崎再話。

ロ、布——売れなかった一反の布。六地藏。足りない分は自分の褌を捲く。(紫波) \* 笠地藏。

ハ、糸臍コ——売れない。笠売りと出会うと笠と交換。〈地藏とは関係なく〉。足りない分は自分の古手拭を捲く。(稗貫) \* 笠地藏

売れなかった場合は、前述したように婆の態度は基本的に無関係となる。則ち、婆の気持ちは「笠を持って来たとして、今夜の何のたしにもならないのだから、せめて地藏様にあげてよかった。」「しかたがない。」「そうすか。それはまだ好え功德してきたごと。」と明らかに〔縮念〕と呼ぶものである。爺の信仰心の度合から言えば、商品価値がない物を用いた分、①よりも②の方が弱い。但し、その事は自分が身に纏った物を取り足りない分を補った行為の評価にもよるだろう。福山は「爺が自分のものをはずしてまで地藏につけてやるというモチーフは、ここで特に重要な位置をしめているわけではない。」(同18頁)と説く。むしろ、眼を向けねばならないのは「雪にぬれている地藏の前を素通りできない爺のやさしさ、自分にできるだけのことをしてやろうとする爺の姿」(同頁)であるという。確かに福山の言うように何をまわしたかは問題ではないかもしれない。しかし、「やさしさ」の段階として売れ残りの笠を被せる、布を捲くという行為と、足りない分は自分が身に纏っている物を被せたり、捲くという行為とは明らかに異なる。いわば、〔自己犠牲〕の質が違う

のではない。田口はこの伝承を「文学的に成熟した伝承」(同5頁)と言っているが、筆者も爺の優しさの表現として伝承者の工夫が見られるところという考えである。全国的には、②イのような型よりも①ロ、ハのような型の方が圧倒的に多いという(田口論文)。後に〔変容過程〕考でも触れるが、婆との軋轢という視点からは、前者よりも後者の方が軋轢が大きく、後に出てきた話型と思われる。

#### 4. 石地藏の描写とそれを見掛けた時の爺の気持ち

- ① 場所——村外れ。道路端。野中。山に行く途中。
- ② 数——六。三。不明。
- ③ 状態——大雨。大雪(吹雪)。大雨+大雪。
- ④ 石地藏を見掛けた時の爺の気持ち——「寒かろう」「冷たかろう」「かわいそうだ」。

石地藏は野ざらしの状態である。その数は地藏は六道の辻に立つという信仰から六が圧倒的に多い。この〔六地藏〕は中世初頭から造る事が盛んになったといわれるが、真鍋広済の「路傍に見受ける石地藏は、ほとんど大部分江戸時代の作で、これは地藏尊が賽の神、道祖神と習合した結果で、地藏尊が、旅行安全・町内安全の守護仏として信仰させられるに至った現れ」(「地藏信仰の源流と地藏菩薩」『地藏信仰』17頁)という説などによって、江戸時代にその制作の最盛期を迎えたと考えるのが妥当であろう。この点から「笠地藏」が比較的新しい民話である事が伺えよう。

それでは、次に六地藏が大雨や吹雪にあってのを難儀に会って可愛そうだという爺の気持ちについて考えてみたい。この気持ちが地藏信仰に拠るのか或いは信仰とは関係ない彼の性格に拠るのかというのが問題となる。「貧乏で正直な」(二戸)「よい爺」(矢巾)とその性格について語られているし、それだけでなく「信心深い爺」(紫波)と地藏信仰との関わりを示すものもある。いずれにしても、前述したように古態から一貫している

のは爺の慈悲深い態度である。夕立ちに遭った道陸神に笠を掛けてやるという「笠地藏」(静岡)も伝えられており、石地藏だからという限定はない。この事は、『日本昔話通観』(岩手)の〈モチーフ構成〉においても、③信心が報われる、④報酬としての富、⑤慈悲深い行為に対する報酬として奇蹟がおこる、というように「信心」と「慈悲深い行為」とが曖昧なまま併置されていること、また教訓を記したものにおいても、①貧乏でも、人には施しはすべきだ。(紫波)、②地藏への功德の必要性。(稗貫)と、これまた並行している事に象徴的に現われている。果たして、爺の慈悲深さを信仰のレベルにまで持っていけるか。その決め手となるのが、婆の怒りを買ってまでという視点である。それは〔変容過程〕考で再度論じるが爺の〔自己犠牲〕の度合と深く関わる。

この爺にとって地藏信仰とはどのような内実を持ちうる信仰だろうか。その可能性を考えてみたい。

地藏は子供の姿となって現われ靈託を宣すとか、地藏はなにかんずく子供を守護するという観念が地藏信仰にはある。それゆえ、老夫婦・子供がいない・地藏信仰とのつながりから「重要なのはこの老夫婦に子供のいないことである。子供は生まれなかったか、早死したのか、それとも水子だったのだろうか。文になくとも、老夫婦は子のないことを悔やんでいるのだ。子に死なれたことを嘆いているのだ。ここで老人夫婦と地藏様が結びつく。」「(『わかる授業』No.20, 7頁, 明治図書, 1981-10)といった〈読み〉も可能だ。岩手の「笠地藏」にはなかったが、「一人息子は早く死んでしまて」と〔一人息子の早死〕を述べ、爺の笠を被せた行為に対して婆が「死んだ息子も、肩身広えふてんだんだあ。」と秋田雄勝郎の「笠地藏」(『日本昔話通観』)のように地藏信仰を明確化しているものもある。〔子供のいない老夫婦〕というモチーフは、地藏に対しての特別な親近感を想定させる。確かに、爺の地藏に対する親し

みの感情の要因として重視してよいが、そうすると怒りを示した婆の心情が不可解になる。(教材「笠地藏」の場合は問題は起きないが)。民話「笠地藏」の場合は老夫婦自身の子供との関係で爺の心情を押し測ってしまうのは、やはり無理だろう。むしろ、爺の信仰心とは路傍の六地藏を日常生活圏の中で家族のように感じる身内の感情と考えた方が自然だろう。崇めるよりも、慈しみの感情が小さな石地藏に向けられた信仰心であり、爺はその感情の代表的人物であったのではないか。爺の自己犠牲的行為は現世利益的要求を満たして貰うための行為ではなかった。それゆえ、婆は怒り、六地藏は来訪して来たのである。和歌森太郎は地藏の菩薩としての性格について「いかなる劣弱のもの罪深いものも、寛大の大悲大慈の心をもって地藏が救済するとの思想は、これを信ずるものに対してはいかなる人格、いかなる道徳的価値をもつ人間に対しても、それを全面的に包容するとの観念を進めた、地藏信者のほとんどあらゆる欲求を叶えてくれるもの、とされてきた徹底ぶり」(『地藏信仰について』『地藏信仰』17頁)と述べているが、わずかな信仰心に対しても、困った時には救ってくれるという地藏の性格も石地藏の来訪理由として見逃されない。近世、延命地藏・子安地藏・子育て地藏・田植地藏といった多くの地藏が民衆によって形成された事がその事を如実に示していよう。頼富本宏が「笠地藏」について「一種の農耕援助地藏の変形と見られないことはない。」(『庶民のほとけ——観音・地藏・不動』NHKブックス147頁)と述べている事も、地藏の菩薩としての性格の自らなる発動という視点から見るならば可能である。

### 〔変容過程〕考

〔構成要素〕考を踏まえて、民話「笠地藏」の〔変容過程〕について考えてみたい。変容の方向としては〔歳神来訪信仰〕から〔地藏信仰〕へと

向かう。話の比重が〔地藏信仰〕へと大きくなって行く。〔地藏信仰〕への比重の傾斜は、爺の自己犠牲の度合によって計る事が出来ると考える。この自己犠牲は婆と軋轢という要因を主要なものとする。考察に入る前に「笠地藏」の民話としての成立を、地藏が話の構成要素として登場した段階と確認しておく。

1(a) 爺が大歳の夜、雨・雪に濡れた石地藏に笠を被せる。その事を聞いて婆は怒る。

☆婆との軋轢は変容過程の中で、変質して行く。この段階の婆の怒りは、〔歳神来訪信仰〕に於ける婆の欲心(もったいないことをした!)というモチーフが現われている。

(b) 旅人が来訪して、宿を乞う。婆は拒否するが、(爺のとりなしで)結果的には泊める。朝、旅人が石地藏に化していて、鼻から米を出していた。

☆歳神の来訪(蓑・笠を着けた旅人)→歓待→富という〔歳神来訪信仰〕の基本構造が生かされている。ただ、その場合でも婆の欲心(一銭にも成らない事はする必要はない。旅人——見すばらしい恰好)が生きていて〔歓待〕という単純な構造を取らない。朝、旅人が黄金に化していたのが〔歳神〕の場合だが、この場合は地藏を登場させた上で富がもたらせられなければならない。

2(a) 爺が雨・雪に濡れた石地藏に笠を被せる。一体だけ被せる笠がなく、背負って家に連れて来る。それを見て婆は怒る。

☆歳神の来訪というモチーフを生かしながら、爺の自己犠牲の要素が入って来る。

(b) 石地藏を置いておく。朝、口から米を出していた。(米をひっていた。)

☆地藏の報恩譚が明確になる。ただし、歳神来訪のモチーフが生きているため、他の地藏の報恩が不成立。

3(a) 爺が雨・雪に濡れた石地藏に笠を被せる。一体は自分の笠を被せる。(婆の怒り)

☆自己犠牲の仕方が、洗練して来る。

(b) 六地藏がやって来る。鼻（口）から米を出す。

☆地藏の報恩譚としては完成する。ただし、報恩の仕方が古態を残す。当然、六地藏がそのままの姿でやって来るという型が成立した以上、彼等が米・金（＝富）を持って来るという型まで今一步である。→教材「笠地藏」。

<瀬田再話は「6人のあみがさを被った人達」と「歳神」来訪型が消え去ってない。>

4(a) 爺が笠を売りに行く。売れない。帰りがけに雨・雪に濡れた石地藏を見掛け、笠を被せる。一体は自分の笠を被せる。

(a) 爺が布を売りに行く。売れない。帰りがけに雨・雪に濡れた石地藏を見掛け、布を被せる。一体は自分の褌（古手拭）を被せる。

☆婆の欲心による怒りが、構成要素として消える。婆の怒りというモチーフが変質して現われる前の中空状況である。(a)の場合、布の所有者は婆であるが、売れなかった事によって、婆の「締念」という中空状況を保っている。→教材「笠地藏」。

5(a) 爺が笠を売りに行く。売りに行く途中で、石地藏を見掛け笠を被せて帰って来る。

(a) 笠が布に替わる。

☆婆との軋轢が新たな展開を帯びて来る。婆の驚き。(a)において婆が爺の行為をすぐさま認める話もあるが、地藏信仰の浸透を強調しようとして、展開としては不自然。

6(a) 爺は、婆の所持していた布（鏡など）を売りに行く途中で、石地藏を見掛け、売った金で笠を買い被せる。婆は怒る。

☆〔構成要素〕考で詳述したように婆の怒りは欲心からではない。爺が自分たちの生活に余りに無頓着である事に対する怒りである。このような婆との軋轢を抱え込んだ爺の自己犠牲によって、「笠地藏」の地藏信仰への変容は完成する。

この〔変容過程〕考で明らかになったと思われるが、教材「笠地藏」は民話「笠地藏」が最終的に入っていった爺の地藏信仰と婆の生活者意識との亀裂の問題を避けている。爺の行為を地藏信仰の共有によって肯定するのではなく、婆は締念によって肯定していたのである。何の交換価値のない笠であっても、それを被せる事を信仰心の現われとして受け取って何らかの恵みを与えてくれるかもしれないというのが、婆の正直な気持ちであったろう。人並みとは言わないまでもせめてささやかな正月の準備が出来ればという願いを籠めての切札としての布（鏡）であった以上、それが可能となるのを態々否定した爺の行為は許されないのは当然であろう。

## さいごに

最後に、〔布地藏〕の問題にふれておきたい。岩手の〔布地藏〕を整理すると、

- ① 布を売って帽子を買って被せる。(北上)
- ② 赤い布を買ってきて頭巾にして被せる。(紫波)
- ③ 布を売りに行き、その布を被せる。(同)
- ④ 頭巾を買ってきてかける。(同)

といったようになる。今まで「この昔話で我々の注意をひくのは、石像が笠を被せてもらったことで生命が付加され、生物的行動をとることである。」（関啓吾『日本昔話通観』解説）といったような、〔笠〕の呪的要素（来訪神の被り物）を重視した見方が一般的であった。しかし、〔布地藏〕の存在はこの説を覆したと言えよう。則ち、〔笠〕は必須構成要素ではなかった事が明らかとなった。

〔布地藏〕の出現について、田口は「笠地藏、即ち布を売り、その代金で笠を買って地藏に与えるという話が存在していたこと。一方、実際に目に触れる地藏は笠姿でなく頭巾等の布を身につけていたこと。この現実の矛盾が話の内容を変形させた。婆の織った布で笠を買わず、布のまま地藏

に与えた方が説明として説得力を有するから。」(3頁)と分析している。則ち、より一層現実の石地藏の形態に影響された結果だという。この指摘を受け入れた上で、やはり強調しておきたいのは、その変容を可能にした背景に地藏信仰の一層の浸透という事態があるという事である。その事態こそ笠が地藏に「付与された意味の忘却」(田口論文、同頁)を可能にしたのである。則ち、民衆は地藏が〔笠〕など被らなくても自らの力によって自在に動くことが出来ることを〔地藏靈験譚〕等を通して知ったのである。

また、婆の織った布という要素は、どうしても脇役とならざるを得ない姿を、爺と対等な関係に持っていくことで、民衆の生活意識・宗教意識の問題にまで我々を誘う要素として再度確認しておいてよいだろう。

本稿は昭和62年度文部省科学研究補助金(一般研究B)に基づく「現代におけるイメージ形成・伝承に関する研究——童話教材の〔語り〕およびそのさし絵の分析を中心に——」の研究経過報告である。

#### 注 —— 岩手県「笠地藏」伝承リスト

- (a) 『全国昔話伝説関係資料蔵書目録、付録：岩手県昔話伝説関係目次一覧』(遠野市立図書館、1986) 所収のもの

- ① 「笠地藏」『浄法寺町昔話集』野村純一編、荻野書房(1982年6月)
  - ② 「六地藏が恩を返す」『紫波郡昔話』佐々木喜善(『佐々木喜善全集』一卷所収)(1986年6月)
  - ③ 「笠地藏さまの話」『すねこ・たんぱこ』平野直著、銀河社
  - ④ 「笠地藏」『遠野の昔話』佐々木徳夫編、桜楓社(1985年6月)
  - ⑤ 「裸地藏と笠」『民俗風信帖』金野静一著、熊谷印刷出版部(1985年3月)
  - ⑥ 「六地藏さま」『昔ッコばなし』江刺市老人クラブ連合会編(1978年3月)
  - ⑦ 「笠地藏」『遠野に生きつづけた昔』佐々木徳夫著、講談社
  - ⑧ 「地藏さまの恩返し」『遠野の昔話』遠野民話同好会編 日本放送出版協会(未見)
  - ⑨ 「地藏様の恩返し」南部民話集『第2みちのく夜話』古川安忠(未見)
  - ⑩ 「六地藏」『私たちの遠野物語、第2集』(未見)
  - (b) 「岩手県昔話伝説関係目次一覧」所収以外のもの
  - ⑪ 「かさじぞう」『みやもりのむかしばなし』宮守ライオンズクラブ編(1987年2月)
  - ⑫ 「お正月には笠地藏」『岩手むかしばなし散歩(三)』北土舎(1984年12月)
  - ⑬ 「地藏さまの恩返し」『紫波の民話』小平民話の会編 国土舎(1987年7月)
- ☆稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第3巻〔岩手〕(1985年10月)
- ☆関敬吾著『日本昔話大成』第5巻 本格昔話4「笠地藏」